

[書評]

Miroslaw Bańko

Współczesny polski onomatopeikon. Ikoniczność w języku

Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN, 2008, 284 s.

渡辺克義

日本語がオノマトペに富むことは論を俟たないが、一般の国語辞典では見出し語として拾われていないことが多い。山口（2003：1）はその理由として次の3点を指摘しているが、いずれも首肯できる。①日本人なら辞書を引かなくても意味が自明、②寿命の短い流行語としての側面をもつものが多いので、見出し語として採用しにくい、③上品とはいえない語彙が多いので、辞書に載せることが憚られる。

しかし、本邦でオノマトペ研究が遅れているということではなく、既に潤沢な先行研究があり、最近では数種の大部なオノマトペ辞典まで刊行されている。また、韓国語や中国語のオノマトペ研究もさかんで、日本語のそれとの対照研究も豊富にある。ヨーロッパ系言語に関して言えば、英語は特別で、十分な先行研究があるが、それ以外では、最近、ドイツ語のオノマトペで先駆的な研究（乙政 2009）が著されたことが注目に値する程度である。ポーランド語に関しては、本邦では、松田（1985：290-292）に記載されている、Romuald Huszcza の手になる対照表や、シェラツカ=バジュル・石井（2006：34-35）、渡辺（1992：195-197）がある程度であろう。

日本語のオノマトペは外国人日本語学習者（初級者はもちろん、上級者も）にとって悩みの種になっている（実際、外国人を主たる利用者に想定したオノマトペの学習書や辞書が刊行されている。たとえば、日向・日比谷 1989, チャン 1990）。そればかりではない。日本語から他言語への翻訳のプロにとっても問題は同じで、日本語のオノマトペに相当する表現が翻訳先の言語にない場合、代替表現で済まざるをえない。翻訳者はその場合、日本語のオノマトペの情緒が失われてしまうことを遺憾に感じている（山口 2003：2）。豊富なオノマトペをもつ日本語の母語話者にとって、ポーランド語のそれがどのようなになっているかは大いに好奇心を刺戟されるテーマである。*Współczesny polski onomatopeikon...* はそうした点にこたえてくれるだけでなく、十分な実用性も兼備していた一冊である。

ポーランド語学においてオノマトペ研究が遅れていたことは、先行研究の乏しさから自明である。著者の Bańko は、盲点となっていたこの分野の研究に多少の貢献をしたいと

思ったことが編纂・執筆動機であった旨を記している (s.7)。Bańko は近年、十冊以上のポーランド語の一般辞典および特殊辞典を編纂している気鋭の辞書学研究者であるが、本書もまた多年にわたる研究成果の一部をなすものである。

本書は2部構成になっている。第1部 (s.11-142 ; s.134-142 は「むすび」および「参考文献一覧」) はポーランド語オノマトペに関する全般的考察、第2部 (s.142-283) はオノマトペ辞典からなる。以下に、紙幅の許す限り、内容を紹介するとともに、若干の問題点を検討してみたい。

第1部は7章から構成されている。第1章 (s.11-39) ではオノマトペの定義が示される。「オノマトペ ①言語外の音ないし動作 (音の発生を伴う) を真似ようとする意図のある、言葉の創造ないし使用 (語中の音のある特徴を真似ようとする意図の場合も含むが、その正確な再現とは限らない)、②以上の行為の結果としての語ないし表現」 (s.18)。「語中の音のある特徴を真似ようとする意図の場合も含むが、その正確な再現とは限らない」とは、動詞 *pleść* 「(つまらないことを) べらべらしゃべる」から派生したと考えられる、「取るに足らないこと」あるいは「些細なこと」を意味するオノマトペである *ple-ple* のような事例を意味する。*bzyzczyć* 「(昆虫などが飛行中に) ブンブンうなる」のような場合は、初めにオノマトペの *bzz...* があり、次いで動詞が派生したと考えられるが、その逆のプロセスを経る場合 (動詞・名詞など → オノマトペ) もあるということになる。いずれにしても、ソシュールのいう言語記号の恣意性は、オノマトペに関しては当てはまらないかもしれない。

第2章 (s.40-53) では著者がどのように語彙を蒐集したかについて記されている。第2部で取り上げているオノマトペは見出し語で326語であるが、PWN社のポーランド語コーパス、文学テキスト (とくに、児童文学)、インターネット、漫画が主要な出典とのこと。

第3章 (s.54-75) ではオノマトペの音韻構造が考察される。既に他言語において研究が進んでいる分野であるが、その成果がここでは援用されている。一部を紹介しよう。オノマトペの最後の文字が重複して示されている場合は、その子音ないし母音が引き伸ばされて発音されていることを示している (例: *paff, puff, uff, sss, tss, szuss, szsz, bzz, wzz*)。ここで注目すべきは、語末にありながら /z/ が有声音として発音される点である。ポーランド語のアクセントは原則として後ろから2番目の音節におかれるが、オノマトペでは最後の音節にアクセントがあるものが多い (例: *kud-ku-dak, ram-tam-tam, trzask-prask*)。

第4章 (s.76-97) ではオノマトペの形態に目が向けられている。従来のポーランド語学研究ではオノマトペの語形成 (造語論) に関する先行研究は極めて数が限られていた。代

表的な文法書には語形成の章は必ずあるが、ことオノマトペに限っては一顧だにされていない場合がほとんどすべてと言っても過言ではない。それだけに本章での記述は重要である。オノマトペが極めて生産的で、無限と言ってもいいことは、Siatkowska (1985 : 286) が指摘しており、Bańko もその主張に与している。実際、*miau, miauu, miauuu; oj, ojoj, ojoj* のような例をみれば、そのことは明らかである。著者は語形成の例をいくつか挙げているが、一つ紹介しよう。接尾辞 *-k, -p, -t* はオノマトペの基幹語彙に付く場合があるが(例：*bzy – bzyk, ćwir – ćwirk, kra – krak, świr – świrk; chra – chrap; bzz – bzzt, fiu – fiut, kiwi – kiwit, pierdu – pierdut, wiu – wiut, ziu – ziut*)、その機能は継続時間の短さを表すことにある。*ćwir* と *ćwirk*、*kraaa* と *krak* では、動作・運動が前者で長時間、後者で短時間であることがわかる。

第5章 (s.98–112) はオノマトペの統語機能について、Boniecka (1977) の先行研究を拡大発展させた内容となっている。オノマトペは間投詞であり、そのため文中で周縁の機能しか果たせないと予想ができるが、本章はそうした考え方が誤りであることを立証している。結論から言えば、オノマトペ(および、その派生語彙)は統語的にすべての機能が果たしえるのである。次の例を見ていただきたい。

W naszym bloku niejedno da się słyszeć przez ściany, więc kiedy już zabrałem się do obiadu, słyszałem znów na klatce schodowej: „Szu-szu”, „stuk, stuk” i „klik-klak” obcasów młodej pani Piątkowej.

(Hanna Januszewska, *Słońce wschodzi*)

拙訳：

私たちのアパートでは壁越しにたびたび音が聞こえてくる。私が昼食の席についたとき、またしても階段のトントン、ツカツカ、コンコンという、若いピョントコフスカさんのハイヒールの音が聞こえてきた。
(ハンナ・ヤヌシェフスカ「陽は昇る」)

上例の場合、*„<stuk, stuk> (...) obcasów”* は、*stuk obcasów* あるいは *stukanie obcasów* と理解することができる。したがって、名詞句相当表現と見なすことができるのである (s.100)。

第6章 (s.113–124) では、オノマトペが活字として表された場合の問題点を指摘している。オノマトペが口頭で最も端的に実現されることに異論はなかろう。では、印刷物など文字化される場合はどのようになっているのであろうか。最後の一文字の繰返し(既述)、ハイフンの使用、文字をすべて大文字で表記するなど、書き手は、その強調の度合いに応じて様々な表現を用いており、視覚的特徴が観察される。次は Bańko が例として挙げている Ludwik J. Kern の *Ferdynand Wspaniały* からの引用であるが、内田莉沙子による邦訳

があるので、あわせて示したい。

A jak się kota głaszcze, to kot mruczy. To musi być bardzo miłe takie: Mrrrrrrrrrrrrrr — na każde zawołanie. (s.14)

なでてやればのどをならす。さぞかわいくならすだろうな。グル、、、、、 (36 頁)

圧巻なのは雨の場面である。かなりの長文なので、一部を引用するだけとする (s.72; 168 頁)。

Drugiego dnia wiatr przywiał kilka nowych chumurek i deszcz stał się gęstszy:

deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz

Trzeciego dnia wiatr zaczął wiać z lewej strony:

deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz

deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz
deszcz deszcz deszcz deszcz deszcz

二日め、風があたらしい黒雲をはこんできて、雨はすこしつよくなりました。

雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨

三日め、風は左のほうからふきはじめました。

雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨
雨 雨 雨 雨 雨 雨 雨

以上がはたしてオノマトペと呼べるかは疑問の余地なしとはしないが、興味深い事例ではあろう。

第7章 (s.125–133) では、辞書学におけるオノマトペの扱いを展望している。現代ポーランド語を扱った金字塔的成果である SJPDor. でもオノマトペは多く拾われておらず、*brzęk, chrr, dyg, klep, kra, kwi, mniam, mrr, pam, pip, ratata, sik, smyrg, sss, tru-tu-tu, umpa, wzz, ziu* などが入っていない。SJPDor. 以降も大半の辞書がオノマトペを多くは収録していないが、PSWP は例外で、それまでの辞書が取り上げていなかった *brzęk, kra, kwi, mniam, pip* などが見出し語に入っている（ちなみに、SJPDor. 以前に出た SW は比較的多くのオノマトペを収めている。たとえば、*brzęk, kra* は拾われている）。オノマトペを辞書に収めることに慎重にならざるをえない理由もある。文学テキストから用例を拾う場合、それが作家個人の造語である場合も多いからである。*Ferdynand Wspaniały* からの次の例 (s.3;11 頁) を見ていただきたい。

Od razu też zaczęły się odzywać z wnętrza kanapy sprężyny:

„Drim!”

„Giam!”

„Brdek!”

そのとたんにソファの中のばねがしゃべりだしました。

「ブーン！」

「バーン！」

「ビーン！」

drim, giam, brdek は Kern 独自のオノマトペであり、他に例がない。内山も翻訳に苦労したにちがいない。*drim, giam, brdek* のような語彙はもちろん一般辞書で取り上げるべきではなく、『Kern 語彙・語法辞典』なるものが編纂された場合に採用を検討すれば十分である。創作のオノマトペが数多い宮澤賢治の作品をポーランド語に訳すことは、おそらく容易ではなからう。

第2部は4つのパートからなっている。Aneks I (s.143–264) はオノマトペ辞典で、アルファベット配列で見出し語があり、発音、アクセント、異形態、意味が示されたあと、文学テキストからの引用が挙げられている。Aneks II (s.265–267) は分野別索引である。ここを利用すれば、たとえばトラクターなどの振動音がポーランド語のオノマトペでどう表現されているかを知ることができる (s.246)。

TER-TER

Ter-ter *itd.* || tyr-tyr *itd.*

Nazwy imitujące terkotliwy dźwięk silnika lub innego urządzenia. Wyrazy pokrewne: **terkotać, terkot, terkotliwy.**

Ter... ter... ter... ter... ter... — terkotała żniwiarka.

(Hanna Zdzitowiecka, *Przeprowadzki kuropatw*)

拙訳：

TER-TER

Ter-ter など || tyr-tyr など

エンジンあるいは他の装置の響く音を真似たもの。類似表現：**terkotać, terkot, terkotliwy**

タッタッタッタッタッ —— 刈取り機が音を立てていた。

(ハンナ・ズジトヴィェツカ「ヤマウズラの引越し」)

Aneks III (s.268–275) では、異形態も含めオノマトペ語彙がアルファベット順に挙げられている。Aneks IV (s.276–283) は Aneks III の逆引き索引となっている。

以上のように、本書はポーランド語学研究の間隙を埋める画期的な一冊であり、外国人学習者・研究者にとっても益するところが極めて大きい。収録された見出し語 326 語、文学テキストから引いた用例 842 例は、今後のポーランド語辞典で必ずやその成果が活かされることだろう。さらに、将来、日本語のオノマトペとの対照研究を進める際にも本書が不可欠の文献となることはまちがいない。

最後に、本書の第 2 部をいくらか拡充した辞書 (Mirosław Bańko, *Słownik onomatopei czyli wyrazów dźwięko- i ruchonaśladowczych*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN, 2009) が最近上梓されたことを記しておく。

参考文献

- 乙政潤 (2009) 『ドイツ語オノマトペの研究——その音素導入契機と音素配列原理——』大学書林。
- ルドウィク・J・ケルン (内田莉沙子訳) (1967) 『すばらしいフェルディナンド』岩波書店。
- バジェナ・シェラツカ=バジュル, 石井哲士朗 (2006) 『微笑んでポーランド語 日本人のためのポーランド語教科書 第一部』東京外国語大学生協同組合出版部。
- アンドルー・チャン (1990) 『〈和英〉擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店。
- 日向茂男・日比谷潤子 (1989) 『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 14 擬音語・擬態語』荒竹出版。
- 松田徳一郎監修 (1985) 『漫画で楽しむ英語擬音辞典』研究社。
- 山口仲美編 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社。
- 渡辺克義 (1992) 『ポーランド語作文研究』泰流社。
- Barbara Boniecka (1977), Funkcje składnikowe wykrzykników onomatopeicznych, *Polonica*, t. 3.
- Ludwik J. Kern (1972), *Ferdynand Wspaniały*, Warszawa: Nasza Księgarnia.
- PSWP: *Praktyczny słownik współczesnej polszczyzny*, red. Halina Zgółkowa, t. 1–50, Poznań:

Wydawnictwo Kurpisz, 1994–2005.

Ewa Siatkowska (1985), Z morfologii tzw. wyrazów amorficznych w języku polskim, czeskim i słowackim, *Studia z filologii polskiej i słowiańskiej*, t. 23.

SJPDor.: *Słownik języka polskiego*, red. Witold Doroszewski, t. 1–11, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN, 1958–1969.

SW: Słownik warszawski = *Słownik języka polskiego*, red. Jan Karłowicz, Adam Kryński, Władysław Niedźwiedzki, t. 1–8, Warszawa: Kasa im. Mianowskiego, 1900–1927.